

大賞

絵本から学ぶこと

石井 亜友美

柳田邦男先生こんにちは。私は現在四歳の息子と三歳の娘をもつ荒川区に勤務する小学校教諭です。

私の子どもたちは本が大好きで、勤務している小学校の図書館や、自宅近くの図書館で本を借りて毎日寝る前に読んでいます。子どもたちはその時間をとても楽しみにしています。学校図書館司書の方が子どものために本を選んで下さるので、いろいろなジャンルの本を読み聞かせることができます。また、最近では自宅近くの図書館で静かにすることもできるようになり、進んで読みたい本を選んでいきます。息子は主に乗り物の絵本や昔話の絵本、娘は主に動物の絵本やとび出すしかけ絵本などが大好きです。

四歳の息子に西本鶏介さんの『おじいちゃんのごくらく』という本を読んだ時のことです。最後におじいちゃんが亡くなっていくところで四歳の息子が泣いていました。「どうしたの。」と聞くと「九州の大おばあちゃんがいなくなって悲しい。」と泣いていました。九州にいた私の祖母、つまり息子にとっては曾祖母が二月に他界しました。二年前に一度遊びに行きましたが、息子が曾祖母に会ったのはその一度だけ。次は今年二月の告別式でした。告別式では普段と変わらない様子の息子でしたが、きつと何か心に残るものがあったのでしよう。約半年前のことをこの本を読むことになって思いだし泣いていました。本は人の感情を豊かにするものだと改めて思いました。

思い起こせば私の祖父が亡くなったのも私が四歳の時でした。私は何が起きたのかあまり理解できず、ただ

母が泣いている姿を見て、それが悲しくて泣いたことを覚えています。息子は今回の告別式で何を思い何を考えたのでしょうか。とても悲しい出来事だったけれど息子の心を動かす経験になったのだと思います。

この『おじいちゃんのごくらくごくらく』という本の中で、主人公の男の子がおじいちゃんに「ごくらくってなに。」と聞いています。それに対しおじいちゃんは「しあわせなきもちになることだよ。」と語っていました。だから息子にも「大おばあちゃんはきつと空の上で、前に亡くなったおじいちゃんと一緒になれて、ごくらくごくらく」と語っていると思つよ。」と伝えました。

祖母の四十九日が過ぎた頃、亡くなった祖母が生前に作った玉ねぎが私の伯父から送られてきました。息子は私が何を言わなくても、下の娘に「大おばあちゃんが作った玉ねぎだから大事に食べるんだよ。」と語っていました。

た。普段は野菜があまり好きではない娘も、息子に言われて一人で頑張つて玉ねぎを食べていました。その光景を見て、大切なことは受け継がれていくのだと思ひました。

本は子どもの心を動かす魔法だと思います。子どもの頃にたくさんの本を読み、心が豊かになるようこれからも毎日読み聞かせを続けていきたいです。私にとつても一日の中でゆつくり子どもと接することができる貴重な時間なので大切にしていきたいです。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

この二二〇〇字ほどの手紙の中には、幼い子どもに本を読み聞かせることに関して、大事なことが六つも記されています。その六点を整理して書いてみます。

(1)地域の図書館や学校図書館に、子ども向けの本に精通した司

書がいて、子どもたち一人ひとりに適した本を積極的にすすめること。

(2)子どもが何かの実体験をして、心を動かされ記憶に刻んでも、大人は子どもがそういう鋭敏な感性を持っていることに気づかないことが多い。子どもはそのことを表現するだけの言語力をまだ持っていないからです。しかし、時間が経ってから、その実体験に共通するようなことを本の言葉や物語で知ると、体験したことが自分にとってどんな意味を持ったのかということ、たとえば不完全であっても、感情や、言葉で表現できるようになるものです。

(3)そういう営みが、子どもの感性や感情をきめの細かい豊かなものに育むのです。

(4)「ごくらくってなに」という、大人が本気で考えたら難しくてすぐには答えられないような問題について、子どもは中途半端な説明では納得できません。石井さんは、自分なりに説明しています。親と子の日常における関係性によって、答は違ってくる場

合があるでしょう。しかし、親が子どもの前で一生懸命考えて、親なりの考えを話すことは、子どもにとっては、自分で考え答を出すという姿勢を学ぶことになると思うのです。

(5)絵本の読み聞かせという時間がないと、親子の接触は瞬間瞬間の断片的なものだけで一日が終わってしまうことになりがちです。しかし、しっかりと読み聞かせをすると、スキンシップ、親のゆったりとした感情をこめた肉声、共に見つめる絵、物語世界の共有という、とても貴重な時間が生まれます。石井さんが書いているように、「一日の中でゆっくり子どもと接することができる貴重な時間」とは、そういうダイナミックな時間なのです。

(6)読み聞かせた絵本に対する子どもの反応から、ふだんは見過ごしがちな子どもの感性の意外なきめ細かさや、子どもの心の成長ぶりなどを理解できるようになるということ。

以上の六点は、なぜ子どもに幼少期から絵本の読み聞かせをしましょうという呼びかけが行われているか、その主要なポイント

の多くをカバーしていると言えます。それにしても、四歳の息子さん、玉ねぎをめぐる感性はすばらしいですね。感動しました。

また、「本は子どもの心を動かす魔法」は名言です。